

異言について

—それは今日も可能か—

D・B・ロング

Tongues Today ?

D. B. Long

異言について

クリスチャンが行なうことや経験することはすべて、聖書の教えに一致し、その教えによってためされるべきです（イザヤ八・20、Iヨハネ二・5を参照）。

経験か聖書か

ヨハネ伝九章で、主イエスは、生まれつきの盲人の目をおあけになりました。この人はみなに、自分が経験したことを話しました。彼は、「ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということですよ」（25節）と言いました。

この人の経験は、聖書の教えと一致しました。パリサイ人たちは、イエスは他の人たちと同じように罪人であると彼に言って欲しかったのですが、彼は、罪人は人の目をあけることができないと指摘

しました。なぜなら、神は罪人の言うことをお聞きにならないからです（詩篇六六・18）。ですから、この奇蹟は、パリサイ人たちが、イエスは罪人であると言っていたことは間違いであることを立証したのです。そして彼は、神がご自分のみこころを行なう人の言うことをお聞きくださることに、盲目に生まれついた者の目をあけた者があるなどは、昔から聞いたこともないと言いつづけてきました。ですから、もしイエスが単なる人間であつて、神から出て来たのでないなら、イエスも盲目の人の目をあけることができないはずですが、実にイエスは、その奇蹟をなさいました。

この盲目の人の経験は、聖書の教えと一致しました。

私たちはクリスチャンとして、いつも勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終えるべきです。同時に信仰を守ること大切です。信仰を守ると言うことは、みことばに従うことを意味します（Ⅱテモテ四・7）。競技をする人は、その規定に従わなければ栄冠を勝ち取ることができません（Ⅱテモテ二・5）。

Ⅰテサロニケ五・二一に、「すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい」と書いてあります。私たちが感情的になるときは、これは特に大切です。そうしなければ、すぐに間違いを犯します。

それゆえ、重ねて言いますが、私たちは、すべての行動あるいは経験を、みことばの教えに照らし合わせ、みことばに一致するかどうかによって、それを受けるか拒否するかを決めなければなりません。

ん。

異言を語る未信者

聖書やクリスチャンになら関係のない人々が異言を語る場合、前に述べた規則は重要です。

信頼できる証人たち（クリスチャンや未信者の）が、エスキモー、アフリカ人、テベテ人、中国人、ペルシアの托鉢僧の間で異言が語られているのを見ました。また、キリスト教に激しく反対する回教徒の中にも異言を語る人がいます。私（この本の著者）は、西アフリカで、聖書の神やキリストのことを全く知らない人々が異言を語るのを見ました。

数百年前にも、偶像礼拝の司祭や預言者、魔法使いなどが異言を語ったことが、物の本に書いてあります。ですから、聖書の神と全く関係のない、昔の大ぜいの人たちが異言を語っていたことがわかります。そのことは今日も同様です。ゆえに、異言を語ること自体は、その異言が神から来たことの証拠にはなりません。そのことについて、聖書のみが私たちを導くことができます。では、聖書は何と教えているか、よく調べてみましょう。聖書に記されている異言は、もちろん神から来ました。聖書と神のことを知らない人々の異言は、人間か、あるいはサタンから来たものです。

聖書の中の異言

旧約聖書の中には、異言を語ることに何れも記されていません。ヨセフ、処女マリヤ、バプテスマのヨハネの両親、ザカリヤとエリサベツたちはみな、聖霊の直接の力と影響を受けましたが、四福音書にも異言について何も書いてありません。生まれたときから、バプテスマのヨハネは聖霊に満たされていました。聖霊ははとのかたちをもって、主イエスご自身に下って来ました。そして主は弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい」とおっしゃいました。

のちほど、新約聖書の中から、奇蹟的に異言を語ることに学びますが、その前に、一つのことを述べておきたいと思えます。

異言を語ることに及ぶのは、初代教会のわずかな期間だけに限られています。この期間は、ペンテコステ（使徒二章）とパウロがコリント人への第一の手紙を書いた（使徒一九章）紀元二十五年と二十七年の間です。この期間以外に、異言を語ることに及ぶ聖書のどこにもありません。

ペンテコステの時には、教会の指導者は四人——ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、ユダ——でした。これらの人たちは、クリスチャンを教えるために七つの書簡を記しました。それらの書簡の中で、聖霊

とその働きに関することは二十七回ほど取り上げられていますが、異言については一度も書かれていません。ヘブル書を入れるとすれば、パウロは新約聖書中の十四書簡を記しました。そして、五十六、五十七年に書いたコリント人への第一の手紙にだけ、異言の問題を取り上げています。しかもそれは、読者をけん責し、正すためでした。使徒時代に、また使徒たちが死んだあとでも、教会で異言を語ることは普通一般的なことはありませんでした。

使徒時代の後

使徒時代の直後に、クリスチャンが異言を語るべきだと教えたのはモンタナスという人だけでした。しかしながら、当時の人々は、彼はにせ教師で、悪霊につかれていると思っていました。モンタナスが信じ、行ない、教えていたことは、決して当時のクリスチャンが信じて行なっていたことではありません。ユーシビアス(一三〇—一八〇)という歴史家がモンタナスについて記しています。

クリソストム(三四七—四〇七)はギリシアのクリスチャンたちの中の有名な指導者でした。彼は、Iコリント一二・一—二はわかりにくい、なぜなら、ここに述べられていることはもう行なわれていないからだ、と言いました。その時までの教会歴史をクリソストムはよく知っており、彼の所見は、使徒時代の後にクリスチャンが異言を語らなかつたことを示しています。

五つのみことば

聖書の中で、異言についての記述は次の五か所です。

マルコ一六・一七——ここに異言の賜物の約束が書いてあります。

使徒二章、一〇章、一九章——。その賜物が与えられたことが書いてあります。

Iコリント一二〜一四章——その賜物は間違った方法で用いられていました。

聖書は異言についてこれだけしか述べていませんが、靈的なクリスチャンは聖書の教えをよく調べます。そして、みことばによって自分の行動と経験をためします。決して自分の感じや経験に、無理にみことばを当てはめようとはしません。

その約束

ある人々は、マルコ一六・一七はあまり重要でないと思っています。この節は実際、原語にあるかどうか問題だと言っています。しかし、よく調べた人たちは、この一七節も確かにマルコの福音書にあると認めます。私もそうです。この約束は、与えられた日（マルコ一六・17）から十日目（五旬節の

目)に成就しました。

ところが、一七節で、弟子たちは異言を語るだけでなく、悪霊、病氣、蛇、毒に対しても力を得ると約束されました。これらの事は、一つの事(弟子たちは毒を飲まなかった)を除いて全部、使徒行伝に書かれています。神の力によって弟子たちは、マルコ伝に記されていないもう一つの事、すなわち、ある場合は死人を生きかえらせることさえしました。

第一コリントの手紙の後には、このような奇蹟は記されていません。かえって、使徒、またその同労者、協力者が病氣になったときでさえ、彼らはそのままでした(Ⅱコリント一二・8、9、ガラテヤ四・12、14、ピリピ二・26、30、Ⅰテモテ五・23、Ⅱテモテ四・20参照)。

マルコ一六章で主は、これらの賜物を「信者」に約束されましたが、これらの賜物は、それを受けた人が特別に賢いとか、特に靈的であるとかというしるしではありませんでした。

約束の成就

異言の約束は使徒行伝二章で成就され、この事は、神が全く異なった新しい事をなさろうとすることを示しました。聖霊は今まで決してなさらなかった方法で、永久にクリスチャンの中に住むようにになりました。これが教会の始まりでした。神は信者たちがまず、ユダヤ人に福音を伝えることを

お望みになりました。使徒行伝の前半は、神がイスラエルの悔い改めをお待ちになった時期を記しています。ペンテコステの日にペテロは、ユダヤ人だけに向かって語ったのです。

しるしの価値

しるしと奇蹟は、いつもイスラエルと関係があります。異邦人は聖書を持っていませんから、約束を受けたり、しるしによって警告されたりすることがありませんでした。旧約聖書の中で神はユダヤ人に、メシヤがなさるであろう、あるしるしを期待するようと言いつけました。主イエス・キリストはそのしるしと奇蹟を行ない、ご自分が確かにメシヤであることを証明しましたが、ユダヤ人は主イエスを拒んで殺しました。ですから今そのしるしが、彼らの責任を問うのです。

ペンテコステの日に、神は大いなるしるしを与えてくださいました。ペテロは、そのしるしはヨエルの預言の成就であると述べました。その預言は、もしイスラエルが悔い改めるなら、神は彼らを祝福してご自分のみもとへ帰らせてくださるというものです。このしるしは、使徒たちがキリストのよみがえりや昇天について話したことは本当であることを証明しました。またそのしるしは、ユダヤ人が主イエスを拒み、主を十字架につけたことは大きな間違いであることも証明しました。ですからペテロは、神が彼らを赦し、祝福してくださるために、その罪を悔い改めなさいと彼らに告げたのです。

Ⅰコリント一・二二には、ユダヤ人が証拠としてしるしを要求することが書いてあります。使徒行伝二・一九で神は、上は天に奇蹟を示し、下は地にしるしを示すと言っています。ヘブル二・三、四には、主ご自身がまず語られ、それを聞いた人たちが確かなものとした救いが記されています。そのうえ、神もあかしして、彼らのあかしにしるしと奇蹟を加えてくださいました。

それで、使徒行伝二章にあるとおり、それが確かに神のみわざであることを示すために、神はしるしを与えてくださったのです。そのしるしは何だったでしょうか。使徒たちがいまだかつて学んだこともなく、知りもしない言語で神のメッセージが語られ、それを聞いた人々がその言語をすぐに理解したということです。しるしとしてのこれらの言語の値打ちは、聞いた人々が理解することができたというこの事実です。もし、だれも使徒たちの言うことがわからなかったならば、そのしるしには値打ちがありませんでした。

次のたとえを考えてみましょう。

私のところにある人がやってきて、私への神のメッセージがあると言います。彼は自分の知らない言語でそのメッセージを知らせると言うのです。もし彼が自分の知らない言語を語るならば（私はその言語を知っています）、これはたしかに奇蹟です。その奇蹟には証拠があります。しかし、もしその人がなんの意味もない音声を出すなら、私は相手にせず去って行くでしょう。なぜなら、そのような意味のない音は、しるしとなる値打ちが全くないからです。